

氏名(国籍)	イ ラッタナー (カンボジア)		
学位の種類	博 士 (社会学)		
学位記番号	博 甲 第 4212 号		
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	Problems of Poverty in Contemporary Cambodian Society : A Sociological Study on Urban Slum, PHNOMPENH (現代カンボジア社会の貧困問題：プノンペンの都市スラムの社会学的研究)		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	好井裕明
副査	筑波大学教授	博士(社会学)	菱山謙二
副査	筑波大学教授	博士(社会学)	黄順姫
副査	中京女子大学教授	博士(社会学)	駒井洋

論 文 の 内 容 の 要 旨

貧困問題は人間の社会生活における、最大の課題の一つとして存在してきた。そしてこの問題は近代社会において深刻化し今日に至っている。しかしながら貧困の原因は、いまだ確定的に語られるものではない。例えばマルクス主義では、資本主義社会における不平等、搾取の問題とされる。その他人口過剰、失業や不完全雇用、未発達な人的資源開発、資産不足や自然災害、さらにはマクロ経済政策の複雑な相互作用、そして無知、知識や技術あるいは労働や共存に必要とされる姿勢の欠如といったことも指摘される。このように、貧困という現象は、経済的、心理学的、社会的あるいは文化的な要因が複雑にからみあって生じているのである。これらの現状を考慮にいたした上で、本論文は現代カンボジア社会の貧困問題を考察する。その際、説明の鍵となる独自の概念が「社会的貧困」である。

本論文は三部構成になっている。第一部は貧困に関する理論的視座の提示、第二部はカンボジアの事例調査、第三部が結論となっている。

まず第一部では貧困に関する理論的考察を行った。そこでは貧困問題に関するこれまで理論、及び視座を「絶対的貧困」「相対的貧困」「世界システムアプローチ」「グローバリゼーションアプローチ」「反貧困政策」の五つの視座から整理した。まず「絶対的貧困」とは基本的な必要物資が絶対的に欠如している状態である。「相対的貧困」とは社会的な関係性上で様々なものが剥奪されている状態である。これらの貧困問題に対し、「世界システムアプローチ」は社会主義的な立場から解決を試みるアプローチといえる。また「グローバリゼーションアプローチ」とは、世界市場の統一によって貧困問題を解決しようというものである。最後に「反貧困政策」とは、特定の国に限定されるものではなく、各国によって行われる、政治的、経済的な政策全般を指している。しかしこれらの理論視座は現状を鑑みるに、必ずしも現実的に有効に機能しているとは言えない。そこで本論文では「社会的貧困」という概念を導入した。「社会的貧困」とは「社会的排除」と「社会的エンパワーメントの欠如」の二つから構成される概念である。本論文で述べている「社会的排除」とは、生活自体の困難さを示す貧困状態、また「社会的エンパワーメントの欠如」とは、社会参加へのアクセスが決定的に閉ざされているという意味の貧困状態を指す。すなわち、「社会的貧困」この二つが不可分な状態

になっており、人が排除されている状態を指す。

第二部ではカンボジアを事例として、この「社会的貧困」の実態を提示した。第一にカンボジアが貧困問題に直面するまでの歴史的過程を明らかにした。そこでは、1970年のヴェトナム戦争の影響化および1975年～1979年までのクメール・ルージュの政権化、1979年～1990年までの共産主義政権化における内戦状態によって、貧困が進んだことを明らかにしている。第二にカンボジアの貧困の現状として、特に「低所得問題」「失業問題」「教育問題」「衛生問題」を指摘した。「低所得問題」とは、月収が約54,050カンボジア・リラという点である。これは一日の収入が0.45USドル平均として換算できるが、世界銀行によれば一般の工業国に比べ著しく貧困であることが指摘される。次にカンボジアの「失業問題」とは、数値に失業者数が表れていない点大きい。すなわち現在、カンボジアでは約85%が農業に従事している。その他の人々は国営企業もしくは、一般企業に従事しているのである。一方教育水準も低く、15才以上の児童の就学率は28.7%となっている。さらに平均寿命も、男性54.4歳、女性58.3歳となっている。主な死亡原因はAIDS/HIV感染、マラリア等である。その点から「衛生問題」が指摘される。第三に上記のような貧困の現状を考慮に入れ、実際にプノンペンで行ったフィールド・ワークと質問票調査の結果を提示している。その結果、プノンペンのスラムに在住する人々は、教育水準が低く、職がなく、衛生状態が悪く、かつ低所得であり、家庭用品が欠如していることが明らかになった（社会的排除）。また金融、仕事、市場、社会参加、相互扶助、男女平等へのアクセスが困難になっていることも明らかになった（社会的エンパワーメントの欠如）。

第三部では五つの視点から結論を述べた。第一にこれまでの貧困問題へのアプローチを整理した上で、「社会的貧困」という概念の重要性を述べた。第二にカンボジアの貧困問題に関するまとめを行った。特に現代カンボジアでは貧困に関する科学的定義が欠如していること、また貧困対策に関して従来のアプローチが適応できないことを指摘した。第三にプノンペンにおける経験的研究の結果を述べた。そこではカンボジアにおける「社会的貧困」は「社会的排除」と「社会的エンパワーメント」の欠如から起こるものだと主張した。第四にカンボジアのスラム街だけでなく、他の国における貧困の発生要因を比較的にあつかった。そこから「社会的セイフティネット」の統合を提案した。最後に現在のカンボジアに関する、貧困政策の提言を行っている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

現代カンボジア社会において、貧困をいかに克服していくことができるのか。本論文は、貧困という現象をめぐる経済的側面のみならず社会、文化的側面にも注目し、フィールドリサーチから得た知見をもとにしながら、上記の課題に取り組んだ作品である。著者自身の今後の社会学的調査研究の実践可能性も考え、以下の点で本論文は高く評価される。

第一に、伝統的な貧困概念の社会学的な検討である。高度に産業化され情報化された社会において、この概念はそれ自体としては分析概念として妥当性を詳細に検討しなおす必要がある。しかし著者が対象とするカンボジア社会など、近代化、産業化、情報化などがさらなる発展段階にある社会において、その問題性を的確に把握する概念として、貧困は依然として重要である。著者は社会学や経済学、世界システム論などの伝統的な貧困概念を丹念に検討し、具体的な調査仮説への適用可能性を含めて、その意義を再確認した。この作業は高く評価されてよいものである。

第二に、カンボジアの首都プノンペンのスラム地域を対象として、フィールドリサーチを実施し、著者の提起する「社会的貧困」の実情を明らかにしたことである。もちろん、この作業は、現代カンボジア社会の貧困をより総合的に把握するための基礎作業といえる。しかし、そこにはカンボジア社会の貧困を、マクロ

な視点からのみならず、ミクロな人々の具体的な日常生活次元から丁寧に把握しようとする著者の姿勢が明確であり、こうした地道な調査実践のさらなる可能性を予見させるものである。

第三に、現代カンボジア社会における貧困克服にむけ、単に調査研究の成果を整理するだけでなく、具体的な政策提言への志向が明確である。これは著者が帰国した後の実践的課題でもあり、課題達成への基礎作業として、本論文は評価される。

ただし、フィールドリサーチによる量的調査の知見と質的調査の知見のより詳細な検討可能性や、結論における政策提言内容のより詳細な検討可能性など、まだ議論を詰める余地は残されている。しかし、こうした余地は今後の著者の研究活動の中で進展していくものであり、本論文の価値や評価をそこなうものではない。

よって、著者は博士（社会学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。